

科学的評価だけでなく、さまざまな人が 対話し情報を共有する活動を

酪農分野のリスクコミュニケーションの問題点と今後

帯広畜産大学畜産フィールド科学センター教授 門平 睦代

■BSE対策の説明会で 痛感したリスクミの在り方

筆者にとっての、初のリスクコミュニケーション(リスクミ)体験は、食品安全委員会のプリオン専門委員会の委員として、「我が国における牛海綿状脳症(BSE)対策」と題した講演を2007年11月、札幌と帯広の2会場で行ったことである。食品安全委員会が作成したスライドを使って、なぜ21カ月齢以上の牛のみ検査すればいいのか、つまり、20カ月齢以下の牛の検査はしなくてもよいのかを説明するよう依頼されたのだ。

スライドは50枚にも及び、05年3月時点において03年7月以降に生まれた20カ月齢以下の牛についてBSE検査を全月齢にした場合と、21カ月齢以上の牛に変更した場合を比較してみると、どちらも「無視できる」～「非常に低い」、つまり検査月齢の線引きがもたらす人に対する食品健康影響(リスク)は、非常に低いレベルの増加にとどまる、というリスク評価結果をお話したのである。

内容が複雑すぎて、1回聞いただけで理解できる人はいないのではないかというのが筆者の感想であった。さらに、筆者の説明の仕方や、解説に40～50分はかかったことなどもマイナスの要因になったかもしれない。これが本当のリスクミなのか？ 一方向の説明だけでは？ と、疑問も湧いた。この体験がきっかけとなり、このままではいけないという思いがリスクミ研究に筆者を誘うことになる。実は、このリスクミの札幌会場には、09年から共同研究者として仕事をするようになる北海道大学の吉田省子さん(後述する3つのプロジェクトを構想し率先して動いた)がいた。

■2つのプロジェクトで 有効性を確認、内容を改善

筆者が関与したリスクミプロジェクトは大きく分けて2つある。1つ目が、北海道大学が受託したRIRiC「はなしてガッテン」プロジェクト(代表・飯澤理一郎教授、当時)

とRIRiC2「市民参加型で暮らしの中からリスクを問い学ぶ場作り」プロジェクト(代表・小林国之助教、同)である。各関係者が説得ではない納得のいくリスクミのモデルを導き出すために、研究者と消費者団体そして生産者団体を中心に、北海道を舞台に参加者同士の対話を重視したBSE問題を巡るリスクミを何度も開催した。肉牛生産組合と消費者協会との対話の実現し、北海道庁の担当者が情報提供者としてリスクミにも参加するようになった。「振り向けば、未来」として、昔語りを等しく価値あるものとして受け止めて、共有することから始める方法や学習会付き熟議場型の有効性が確認できた。

2つ目のプロジェクトは、同じく北海道大学の「リスクミ職能プロジェクト」(代表・小林国之准教授)である。「リスクミ能力を身に付けた人材を養成する」ことを目的に、学生や社会人らが各自の職業などを通じた専門性の中で、リスクミの場をつくっていくような「素養」を身に付けるための訓練モデルの作成に取り組むことが課題である。中でも、「リスク問題を多様な視点から見ること」、「多様なアプローチからの対策・対応を取れること」に重きを置いた。

具体的には、これまでに実際に行われたリスクミを事例としたケーススタディーや、リスクミの場の企画書を模擬的につくるなど、実践的な内容が中心となっている。このプロジェクトで養成される能力あるいは素養とは、①職業ではなく職能として②聴く耳を持つ媒介者③専門性の文脈の中での媒介行為④リスク問題を多様な視点から検討できる—の4つである。既に18年7月、北海道大学の大学院生を対象に、実践型集中講義方式で2単位の講義を実施した。また、帯広畜産大学では18年12月、社会人を対象に1日間で学ぶ簡易タイプの研修事業も開催され、模擬リスクミとしては、「GM(遺伝子組み換え)飼料新表示制度とGM飼料を考える」意見交換会が題材として使われた。参加者の意見も参考にしながら、今後に向けて研修内容を改善していく予定である。

■食や農業に真に望むものが 対話を通し見えてくる

BSE問題のように、家畜だけでなく人の健康にも関わるリスクについては、食品安全委員会において科学的な調査や評価、行政や制度による管理が行われている。リスクミとは、それらの評価や管理に加えて、生産者や消費者などの関わりのある人々の意見を聞くだけでなく、社会のさまざまな人々が対話などを通して、共に考え、協働して場をつくり、多様な情報や物事の見方を理解し合い、それらの共有を試みる活動である。

このようなリスクミの場では、前述した筆者の体験のような、科学的な知見や制度の現状、現場での取り組みなどに対する理解を進めるための説明がされるのが一般的である。しかしながら、そこからもう一歩踏み込めば、リスク問題に人々はどのような不安や疑問を抱えているのか、ひいては、食や農業に対して真に望むものは何か、といったことが対話を通して見えてくる。つまり双方向的な「コミュニケーション」によってリスクの管理や対応はより進んだものとなるからだ。同時にこのようなコミュニケーションの下では、部分的・一時的な不安や疑問を生み出しながらも、絶えざるやり取りを通して関係者間の全体的・長期的な信頼関係はより一層強まる。

このようなリスクミを続けていくことで、多くの人々が納得のいくリスクへの対応ができる社会になっていくと予測している。

なお、本プロジェクトに興味のある方は、ホームページ(<http://lab.agr.hokudai.ac.jp/voedtonfrc/>)を参照願いたい。

プロフィール

●かどひら むつよ

1955年生まれ、埼玉県出身。78年岩手大学農学部卒業(獣医学士)、86年アメリカ・カリフォルニア大学ディヴィス校獣医学部修士課程修了(予防獣医学修士)、94年カナダ・ゲルフ大学・オンタリオ獣医学部博士課程修了。青年海外協力隊獣医師、国連食糧農業機構や国際協力事業団の獣疫学専門家などとして海外で活躍。99年名古屋大学助教授、2005年帯広畜産大学准教授、11年から現職。01年から獣疫学会理事、05年から内閣府食品安全委員会プリオン専門委員会委員などを務める